
オリザ

青柳朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オリザ

【Zコード】

N4786T

【作者名】

青柳朔

【あらすじ】

「あなたはまるで、人形のようですね」突きつけられたひとつの一言葉に、僕は何も感じなかつた。君に出会うまでは。そのひとつに出会うまでの僕は、生きているようで生きていなかつたのかかもしれない。君に出会つて、僕は日向の心地よさも風の香りも、花の蜜の味も知つたんだ。オリザ、君のおかげだよ。

あまり屋敷にいない父様も母様も、良き領主になるために勉強しない、と言う。だから僕は勉強ばかりしていた。前の家庭教師の先生は、僕のことを優秀な生徒だと褒めた。

でも新しい先生は最初の授業が終わつた後、ため息を吐き出して言つた。

あなたは人形のようですね、と。

久しぶりに、屋敷の中は騒がしかつた。長い間実家に戻つていた僕の乳母がまた屋敷に仕えることになったからだ。乳母のアリサは僕が五歳になる前に屋敷を去つたので、僕自身にはあまり彼女に関する記憶がない。

「お久しぶりです、ルートヴィッヒ様。もう十一歳になられたんですね」

大きくなりましたね、と目の前で柔らかく微笑む人がその乳母だという。ぼんやりとした記憶の中に少しだけ面影が残つているような気がした。

「久しぶり」

短く答えると、アリサは困ったように微笑んだ。

「……ルートヴィッヒ様は、色が白いですね。あまり外に出ていないのではありません？ 少しだけ、私と散歩でもしましようか」

僕を気遣うように、アリサは声をかけてきた。拒む理由もないから、僕は頷く。

アリサが玄関を開けると、外の眩しさに目を細めた。用もないのに外へ出るのはどれくらいぶりだろう。

「いい天氣ですね」

アリサが気持ちよさそうに咳く。確かに今日は晴れているし、気温もちょうどいいくらいだ。

僕はアリサに急かされるまま、庭に出た。ちょうどその時だ。「ちょ、ちょっとだけ我慢してね。すぐにおうちに帰してあげるから、て、あ、わっさやああっ！」

突然の悲鳴が聞こえたかと思うと、目の前に入人が落ちてきた。まだ青い若葉がぱらぱらと上から降つてくる。

「ま、まあ！ ルートヴィッヒ様、お怪我はありませんか？」

アリサは一瞬だけ驚き、そしてすぐに僕の無事を確認した。僕の真上に落ちたのではないか、もちろん怪我はない。

「……あなたも大丈夫？ オリザ

アリサが落ちた人を振り返りながら問う。薄手のコートを着た女人だ。

「だ、大丈夫です」

アリサを見上げて答えている顔には、あちこち擦つたような傷がある。

「ルートヴィッヒ様、私と一緒にこの屋敷にやつて参りました、オリザとおっしゃいます。明日より屋敷で働くことになりますので、どうぞよろしくお願ひしますね」

アリサが僕を振り返り、その人を紹介した。

「は、はじめまして！ オリザといいます！ 十六歳です！」

よろしくお願ひします、と頭を下げた彼女の手の中で、ピイと小さな鳴き声が聞こえた。手のひらに優しく包み込まれるように、小さなヒナがいる。

「あら、かわいいこと。巣から落ちてしまったの？」

「ええ、そうみたいなんです。だから親鳥が帰つてくる前に戻してあげようと思つたんですけど」

失敗しちゃいました、と彼女は恥ずかしそうに笑う。僕が知る限り、女性が木登りするなんてはしたないことははずだ。それに。

「無駄だよ。巣から落ちて、人の匂いがついたヒナは親鳥に見捨て

られるんだから」「

前に読んだ本にそう書いてあつた。だから僕は助言のつもりでそう言つた。けれど彼女は、目を大きくして首を傾げる。

「そんなこと、やつてみなくちゃ分からぬじやないですか」「驚いた。本に書いてあることをそんな理由で否定したこと」「これでも木登りは得意なんですよ。ちょっとこの服じゃやりにくいんですけどね」

長いスカートは彼女の足首まである。

「まあ、今庭師を呼んでくるわ。ちょっと待つててちょうどいい」「アリサが驚いて奥にいる庭師を呼びに行こうとするが、彼女は「いえ」と遮る。

「大丈夫です。早く戻してあげないと、親が戻つてきちゃう」「そう言つて彼女は片手にヒナを大事そうに持つて、するすると木の上に登り始めた。猿みたいだ。

「あらあらまあ、すごいわねえ」

アリサが感心したように彼女を見上げていた。

あつとこく間に彼女はヒナを巣へ戻し、登つた時と同じように器用に降りてきた。

「二回目ですからね、コツは掴みました」

何も言わない僕とアリサを見て、彼女は笑う。変わつた人だな、と僕は思った。

彼女はとても目立つた。

声が大きいから近くにいるとすぐに分かるし、失敗ばかりしているようで叱られていることをよく見かける。それに彼女も、僕を見つけると必ず話しかけてきた。

「あ、おはようございます、ルートビヒ様」

書斎へ行こうと思つたら、廊下の掃除をしていた彼女と会つた。

「ルートヴィッヒ」

「のやり取りも何回田だらうか。彼女は僕の名前をつまへ言えないと嬉しい。」

「あ、す、すみません。長い名前って苦手で……」

「僕が言い直すたびに彼女はしょんぼりと肩を落とす。年上のくせに、僕よりも子どもっぽい。」

「……ヒナは元気？」

彼女は会うたびにあの時のヒナの様子を報告していくので、僕はついそう聞いてしまった。すると彼女はぱっと顔をあげる。

「はい！ すぐ元気なんですよ！ お仕事の合間に様子を見に行くんですけど、親鳥からいっぽい「はんをもらつてゐみたいです！」さつきまで落ち込んでいたのに、生き生きと話す彼女に僕は少し呆れた。

「そう。よかつたね」

「はい！ あ、じゃあ今から見に行きますか？」

「え？ いや、僕は」

「善は急げです！ 行きましょ！ ルートビーヒ様！」

ルートヴィッヒ。そう訂正する暇もなく気がつけば彼女に腕を引かれていた。

彼女は玄関を開けて振り返る。

「今日もいいお天氣ですよ！」

そう言つて、飛び込んできた日の光を背に笑う彼女は、すぐ眩しかつた。

「ほら、見えますか？ あそこで」

彼女は木の下に僕を連れてくると、上を指差した。

巣をすぐに見つけることが出来ずに田を凝らしていくと、彼女は僕と田線を合わせて、またその巣を指し示した。

「……あ

緑色の葉っぱの中に、枯れ枝を見つけた。器のような形の巣の中

には数羽のヒナがいる。餌はまだかと主張して口を大きく開けていた。

「見つけました？ まだまだ小さいですよね」

どのヒナがある時のヒナなのは僕にはわからなかつた。けれど彼女は巣を見上げてうれしそうに笑つてゐる。

「あ、無理やり連れ出してもみません。ルートビーヒ様。書斎に行かれる途中だつたんですね？」

僕が持つたままだつた本を見て、彼女は今さう氣づく。

「……いいよ、書斎でこの本を読もうと思つただけだから」無理やりだつたことは否定しない。

「それなら、外で読むのも気持ちいいかもしだせませんよ？ 今日は風もあつたかいし、日差しも強くないですから」

「外でつて……どこに座つて？」

椅子でも用意してもらえばいいんだろうが、と僕が悩むと彼女は当たり前のように木の下に腰を下ろした。

「ここに座ればいいんですよ。ほら、日陰になつててちよづじいぢやないですか」

彼女は座つたまま僕を見上げてくる。

……地面に座るなんて考えたこともない。そんなこと習つたこともない。

「汚れるよ？」

「大丈夫ですよ。土は乾いてるし砂が服についたら払えばいいんです。嫌なのでしたら私の膝に座りますか？」

ぽんぽん、と膝を叩かれてかつと顔が熱くなつた。十一歳にもなつて膝に座るなんて。

「いい」

僕はそのまま彼女の隣に腰をおろして本を開いた。木漏れ日が開いた本の上に影をつくる。風は頬を撫でる程度。確かに、心地よいような気がした。

「ちょっとオリザ！ こここの掃除を放り出して何してたの！？」

屋敷に入り、彼女と別れてすぐ、廊下の角で怒鳴り声が聞こえた。思わず部屋に入ろうとしてやめる。

「すみません、すぐにやります」

「当たり前でしょう！ サッサとしなさい！」

そう怒鳴った使用人はすかすかと大きな音を立てて去っていく。彼女の様子を見てみると、いつもと何の変わりもなくただ黙々と箋を手に掃除している。

「僕を言い訳に使えば良かつたのに」

僕と一緒にいたのは本当なんだから。僕のわがままに付き合つていたんだとでも言えば、あそこまで怒られることもなかつただろう。「どうしてですか？ 確かにルートヴィヒ様と一緒にいましたけど、それと私がお仕事しなかつたのは別ですよ？」

「……ルートヴィヒ」

「え、あ、すみません」

僕が言い直すと彼女は肩を落とす。こんなことで簡単に落ち込むくせに。

「そんなに名前にこだわることないじゃないか。他の人は皆お坊ちやまつて呼んでるんだから」

「ダ、ダメですよ！ 名前は親からもらう初めての贈り物なんですよ？ 大切にしなきゃいけないんです！ ちやんと言えるようにがんばりますから！」

力説する彼女に呆れて、僕は呟く。

「……ルートヴィヒ」

「え？」

なんとなく恥ずかしくて彼女を見ることができず、僕は横を向いたまま続けた。

「ルートヴィヒ。小さい頃に使っていた愛称だけど

それも母様やアリサくらいしか呼ばなかつた。

「はい、ルーア様！」

彼女は嬉しそうに笑つて、僕を呼んだ。

それから僕は、ほんの時々だけ外で本を読むようになった。

「ルーア様！」

僕を呼ぶ声が聞こえる。顔を上げなくとも誰だか分かつた。この屋敷で唯一まともに僕の名前を言えない人。

「ここにいたんですか。私もちょうど休憩中で、ヒナを見に来たんですよ。もう毎日の日課みたいになつてるんですけど、田に田に大きくなつていくから楽しみで」

「本読んでるから、静かにして」

このままで止まりそうにない彼女のおしゃべりに釘を刺して、僕はまた本を読み進める。彼女は「はい」と小さく答えて、僕の隣に腰を下ろす。

「気持ちいい風ですね。ピクーックにでも行きたいくらいです」「……」

独り言なのか僕に向かつて言つているのか。ただ僕は黙つたまま返事はしなかつた。

「想像したら何かお腹空いてきません？ 料理長に何か作つてもらいましょうか」

「……」

「ちょっとだけピクーック気分を味わえますよ？ 答案だと思いません？」

「……オリザ」

ふう、とため息を吐き出して僕は本を閉じた。

「邪魔しないでつて言つたつもりだつたんだけど」「邪魔なんてしていません。独り言ですから」

にっこりと笑つてオリザは言い切つた。大きな独り言だ。

「お腹空きません?」

「……少し」

素直に答えると、オリザは満足げに微笑んで調理場へと走った。

その後ろ姿を見送りながら、僕はまた本を開く。

一緒にいる時、オリザはよくしゃべった。僕が聞いてもいないことまでたくさんのこと。

家は農家なのだと、妹と弟がたくさんいるんだとか、だから自分は家のために働いているんだとか。

オリザのことがほとんどだつたけど、あの花が綺麗だと空が青いとか、そんな当たり前のこととオリザは特別なことのうつに詳しついていた。

オリザと一緒にいると、僕の目に映る世界まで鮮やかになるうつだつた。

それからしばらくして、オリザがアリサと一緒に僕の部屋にやって来た。

「今日よりルーア様付の使用人を務めさせていただくことにになりました。よろしくお願ひしますね」

オリザと一緒にやつて来たアリサがやけに嬉しそうに笑っていた。今まで僕専属の使用人なんていなかつたのに、どうこう風の吹きまわしだらう。

「オリザにとつても良い経験になると思います。また、ルートヴィッヒ様にも良い影響があるでしょう。仲良くやつてくださいね」

「はい、がんばります!」

オリザはともかく、どうして僕まで。そんな疑問も浮かんだけれど、わざわざ問うのは面倒だった。ここ数日は毎日のようにオリザと顔を合わせていたし、そのたびに話しかけられた。それが当たり

前になるだけだろうと僕は気にしなかった。

オリザはおしゃべりだけ、一緒にいても不思議と鬱陶しくはない。むしろ新鮮だった。オリザは僕が知らないことも知っていたし、僕が考えないことも考えた。

僕が知っているのは本に書いてあることばかりで、オリザが知っているのは本に書いてないようなことばかりだった。僕は花の名前を知っているけど、オリザはその花の蜜が甘くておいしいと言つ。部屋で本ばかり読んでいると、オリザは僕の腕をひっぱって外へ連れ出した。そして僕の知らない世界を教えてくれた。

僕はそんな日々に満足していた。今までと違うことにとまじつことはあつたけど、それ以上に楽しかつた。

そしてオリザは僕の世話を中心に仕事をするようになった。特別な仕事があるわけでもなく、彼女は相変わらず掃除をしたりお茶を淹れたりしている。

家庭教師の先生の授業が終わって、部屋に戻りついていた時のことだった。

「いいわよね、あんたはお坊ちゃんの『機嫌』とつてればお給料がもらえるんだからー！」

そんな声が廊下に響いた。その後すぐに何がが割れる音。

お坊ちゃんという言葉に、僕は思わず角を曲がらずにそのまま隠された。

「こつちはそれだけじゃないのよ、あんたみたいに呑気にしてられないの！」

そして大きな足音が向こうへと去っていく。

途端に静かになった。僕には何があったのか、何が起きたのかよく分からなかつた。ただ言えるのはあんなキツイ言葉を投げつけられたのはオリザだということ。

少し躊躇いながらも僕は一步踏み出して、廊下でしゃがみこんでい

るオリザを見る。

「……オリザ」

声をかけると、オリザは顔をあげた。いつもと変わらず、優しく笑つて。

「ルーア様、どうされたんですか？」
オリザは割れた破片を拾つて、

「どうして言い返さないの？」

問いかけると、オリザは苦笑して「聞こえましたか」と言つた。
「あの人には、あの人なりに辛いことがあるんですよ。それに、私が仕事できないのは本当のことですし」

「でも！」

なぜかはわからぬ。けど僕は許せなかつた。

「オリザはがんばってるじゃないか！」

失敗してもめげずに笑つっていた。それがすごいなつて僕はずつと思つていた。

それなのにオリザは「仕方ない」と笑うだけで怒りもしない。オリザは別に僕の機嫌をとつてているだけじゃない。ちゃんと仕事をしている。それを僕は知つていた。

「家のために働いているじゃないか！ それをあんな風に言われて

「」
唇を噛み締めて、手を握りしめた。よくわからない熱い何かが胸の奥からふつふつと沸き上がりつてくるような感覚だった。

「ルーア様」

オリザは優しく微笑んで僕の手を包み込んだ。オリザの手は、かさかさだつたし、固かつた。働いている人の手だ。

「私のために、怒つてくださいありがとうございます」

そう言つてオリザは笑う。嬉しそうに。本当に嬉しそうに。
そうか。

僕は、怒つていたのか。

オリザは変わらなかつた。今までと同じように仕事をして、その合間に僕に話しかけてきた。

僕はどうしたらいいのか分からなかつた。

何かに対しても怒るなんて、初めてのことだつたから。オリザがあんな風に言われたことにも腹がたつたし、それを仕方ないと言つてしまつオリザにも怒つていた。行き場のない感情を上手く片付けることができずに、僕は少しだけオリザから遠ざかつた。

逃げるようになつてきたのは、書斎だ。

書斎を使つているのは僕くらいしかいない。もともとは父様の書斎だけ、屋敷を留守にすることが多く本を置くだけの部屋になつてしまつた。

僕はオリザには何も言わずに書斎で本を選んでいた。言えばたぶんついて来ただろう。

何代も前から集められた本はいくつもの本棚を埋めていた。僕は長い時間そこにいたんだと思う。僕以外の人がやつて来たことに気づかなかつた。

「オリザもたいへんよね」

突然の声に、僕は驚いて持つていた本を落としそうになつた。

「なんで？」

オリザの声だつた。僕は本棚の陰に隠れながら声の聞こえる方を見た。オリザと、知らない使用人が本を抱えて立つていて。

「だつてあのお坊ちゃんの相手をしてるんでしょ？ なんか不気味じゃない。あの子。子どもらしくないっていつか」

「そりかな？ そりでもないよ」

僕は隅にうずくまつて、膝を抱えた。ばくばくとうるさい心臓の

音が「一人に聞こえるんじゃないか」と心配していた。聞いてはいけない会話だということは、分かつていて。けれど身体は動かなかつた。「私も長いことここで働いてるけどさ、お坊ちゃんが笑つたり泣いたりしてるとこ、見たことないよ？ いくら厳しくしつけられてるからつてもう少し子どもらしい一面があつてもおかしくないでしょ？」それがないの。まるで人形だわ」「気持ち悪いわ、と呟く声に、僕は何も言えなかつた。

『あなたは、まるで人形のようですね』

少し前に、先生に言われた言葉を思い出した。

その時は何を言つているんだろうと思つた。

『人間らしさがない。そこでお行儀よく座つている人形となんら変わりありません』

まったく同じことを、今言われている。

頭を何かで殴られたような衝撃だつた。先生に言われた時には何も感じなかつたのに。

「そんなことないよ」

沈んだ僕の心を、オリザの声がすくいあげた。

「ルーア様だつて笑うこともあるし、怒ることもあるよ。それに、すごく優しいの。私よりずっと物知りだし、真面目だし」

それにね、とオリザはぽんぽんと僕を褒める言葉を言つ。聞いている方が恥ずかしくなるくらい、溢れる褒め言葉に僕はいたたまれなくなつた。

「はいはい、わかつたわかつた」

呆れたような声がオリザの言葉を遮つて、よつやく僕に対する賞賛の嵐は止んだ。

「まあ、確かに……お坊ちゃん、少し変わつたけどね」

声と一緒に、扉の開く音がする。

「あんたが来てから、少しだけ空気が優しくなつた気がするよ」

その言葉は、少しずつ遠ざかり最後の方はかすかにしか聞こえなかつた。でも、僕の耳には確かに届いた。

パタン、と静かに扉が閉まる。

一人きりになつた書斎は、すゞく静かになつた気がした。

「……僕は、変わつたのかな」

呟いた声は、思った以上に大きく部屋の中に響いた。 分からなかつた。なんだか分からないことだらけだ。僕には変わつたかどうかの自覚なんてなかつた。

なんとなく窓際に寄つて外を見た。ちょうど、あの鳥の巣のある木が見える。巣は葉っぱに隠れて見えないけど、親鳥らしき鳥が木の近くを飛んでいた。

空は曇つている。もしかしたら雨が降るかもしれない。今日外で本を読むのは止めておいた方がよさそうだ。

「ルートヴィッヒ様、こちらにいらしたなんですか」

ノックの音に気づかなかつたみたいだ。いつの間にかアリサが書斎の扉を開けてこちらを見ている。

「先生がいらっしゃりますよ。お勉強の時間です」もうそんな時間だつたのか、と思った以上に時間が経つていたことに驚かされた。

「……今行く」

短く答えて窓に背を向ける。

「ああ、必要ありません。今日はここで授業をしましそう。たまにはいいでしよう」

アリサの後ろから顔を出した男は、僕の家庭教師だ。僕は、この人が少し苦手だ。いつも淡く微笑んでいて、何を考えているのか分からぬ。

「……どうかされましたか？ 少し顔色が悪いようですが」

先生が僕の顔をじっと見て問う。

「いえ、別に……」

「何もない、と言おうとして何故か言えなかつた。具合が悪いとか、そういうことは、まったくない。」

先生は僕を見て微笑んだ。その、何もかも見透かされてしまつよ

うな目がなんだか嫌だつた。

「温かいお茶を持ってきていただけますか」

隣にいたままのアリサに先生は言つ。アリサは「はい」と短く答え、すぐにその場から去つた。

「悩みことがあるのなら、誰かに話した方が楽になりますよ。まあ私に話せとは言いませんが」

先生は部屋の中央に置いてあるソファに腰を下ろした。

「……先生は、以前僕のことを人形のようだとおっしゃいました」

「ええ、そうですね」

せらりと先生は肯定する。

「どうして、ですか？」

すぐるような思いで質問を投げかけた。

先生は顎に手を添えて、また僕をじつと見る。まるで何かを確かめるように。

「生きている、という感じがしなかつたんですよ。あなたからは人間らしさや人間臭さ そう、子どもらしい一面がなかつたんですよ。大人に従順でありすぎるが故に、あなたからは自らの意思を感じなかつた」

人形のようだ、という言葉より明確な言葉を、僕はただ素直に受け止めた。

「そして実際、あなたは人形のようだと言われても何も言わなかつた」

「そうだ。だつてあの時は何も感じなかつたから。おかしなことを言うな、程度にしか思わなかつたから。」

「それなら先生。生きてるつて、なんですか」

先生は笑う。

「それは難しい質問ですね」

まるで答えを知つているような顔だつた。

心臓が動いている。呼吸している。それは生きている証拠だ。けれど僕が求める答えはそんなものじゃなかった。

先生は結局答えを教えてくれず、授業は終わった。にっこりと意味ありげに微笑むだけで、肝心なことは言つてくれない。やっぱりあの先生は苦手だ。

「ルーア様、お茶ですよ」

ずっと答えを考えている僕の前に、オリザがそつと紅茶を置く。珍しく一度も転ぶことなく無事に運べたみたいだ。

オリザは、図書室での会話を僕に聞かれていただなんて思つてもみないだろう。オリザのたつた一言で、どれだけ僕が嬉しかったかなんて。

「……ねえ、オリザ」

お茶を運び終えたオリザは部屋から出でていこうとしているところだった。声をかけると、オリザは振り返つて「はい?」と答える。こうして真っ直ぐにオリザを見るのは久しぶりだ。

「生きてるって、なんだと思う?」

オリザはぽかんと口を開けた。質問されるとは思つていなかつたんだろう。

うーん、とオリザは少し考え込むように黙り込む。僕はまたに藁をも掴む心地だった

「えーと……そうですね。寝て、起きて、食べて……それから笑つたり怒つたり、時々泣いたり、いい天気だなあとが楽しいなあって思つたり感じたり……そういうことじゃないでしょうか?」

今度は、僕が驚く番だった。

それはあまりにも単純な答えで、僕では決して思いつかないもの

だつた。

「あ、ははは」

思わず笑みが零れた。僕が求めていた答えは、なんて簡単なものだつたんだろう。そのことに気づかされると、おかしくて仕方なかつた。

そう。僕は確かに人間らしくなかつた。寝て起きて食べて。その動作を繰り返すばかりで僕は思うことをしていなかつた。大人に言われるがままに動いているだけで。

良き領主になれ、という両親の言葉に従つて勉強ばかりをして。こうしてはいけないと先生に言われたからその通りに従つて。そこに僕の意思はなかつた。

「わ、私そんなに面白いこと言いましたか？」

笑い始めた僕を見てオリザが情けない顔をする。間違いを指摘された子どもみたいに。

「ううん」

僕はきつぱりと答える。

「オリザは、今すこいことを言つたんだよ」

それはまるで僕を変える魔法の呪文みたいに。

今日はいい天氣だ。青い空を見上げて思つ。

庭に出ると、風がやさしく木を揺らしている。僕は一本の木を見て思わず微笑んだ。

「ルーア様！」

オリザの声が聞こえて、僕は振り返る。オリザが慌てた様子で駆け寄ってきた。

「こんなところにいらしたんですか！　先生がお待ちですか！」

最近よく何も言わずに外へ出ている僕を追いかけてくるのは決まつてオリザだ。敷地内からは出でていないといつても、屋敷は庭まで含めると広い。

「待つて。今日だけ見逃して」

オリザが僕の腕を掴んで屋敷まで連れ戻そうとしたので、僕はさやかに抵抗した。いつも見つかれば大人しく帰っていたから、オリザは不思議そうに僕を見る。

「何があるんですか？」

その問いに、僕は木の上を指差した。

僕につられるようにオリザが木を見上げる。

「今日みたいなんだ。巣立ち」

見た目だけはもう親鳥と変わらない姿のヒナたちが、今にも巣から飛び出そうとしている。まだ決心がつかないのか、どれも羽をばたばたさせているだけだ。

「あっ」

オリザが声を上げる。

一羽のヒナが意を決して巣から飛び出した。親鳥と比べるとまだ少し不安定に。それでも確かに空を飛びまわっている。

それに続くかのように次々とヒナたちは空へと飛び出した。

「よかつた。皆無事に巣立ちましたね」

最後の一羽が巣立つた。まだ僕らの見える範囲を飛び回っている。遠くへ行くのは怖いのかもしれない。

でもあの小さな鳥たちは、もう自分の意思で飛んでいる。

「すごいね。まだ生まれたばかりなのに、もう自分たちの力で生きていいくんだ」

そう思うと、あんなに小さな生き物なのに僕よりもずっと「いい存在のよう」に感じる。

「動物も、植物も、強い生き物ですからねえ」

オリザは微笑みながら空を見上げている。オリザのその一言は、僕には大きな発見のように感じた。

「……ねえ、オリザはこれから仕事?」

「はい、そうですよ?」

首を傾げながらオリザは答える。たぶん、僕は今この瞬間、イタズラを思いついた子どもと同じ顔をしているに違いない。

「サボつて、ピクニックにでも行かない?」

だつて、こんな天氣のいい日に、こんな素敵な日に、部屋にこもつて勉強なんてもつたいたいない。

オリザは僕の言葉を飲み込むように黙り込んで、そして笑う。このイタズラの共犯者のように。

「……今日だけですよ?」

僕は何も答えずに、その手をとつて走り出した。

食べて、寝て、起きて。怒つて、笑つて、時々泣いて。僕は自分で考え、選び、行動している。

誰にも、僕のことを人形みたいだなんて言わせない。

僕は今、確かに生きているから。

(後書き)

はじめましての方もいらっしゃるかもしれません、ひとまず
は読みありがとうございました。

青柳朔と申します。

この作品は学校の授業で書いたものに修正を加えて投稿させていた
だきました。テーマを私なりに組み込んで書いたつもりです。ここ
で何をテーマにしたかを語るのは無粋ですので口を開かれていた
だきますが。

読んで下さった方に何かしら感じていただけるものがあるのなら幸
いです。

ではまたどこかの世界の片隅でね会ってきますよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4786t/>

オリザ

2011年5月22日19時40分発行